

書評と紹介

今井 宏編

『世界歴史大系 イギリス
史2 近世』

西 川 杉 子

イギリスの近代史に関心を持った学生が、取りあえず一冊、特定の分野に片寄らない全般的な、しかも興行きのある通史を求めた場合、残念ながら、従来、特に適切なものは見当たらなかった。例えば、大野真弓編『イギリス史』（山川出版社）と青山吉信・今井宏編『概説イギリス史』（有斐閣）は、それぞれ一長一短があるとはいえ、以上の要求に近い概説書であるが、いずれも一冊で古代から現代までを収めているがために、記述が最少限に切り詰められてしまっているし、村岡健次・川北稔編『イギリス近代史』（ミネルヴァ書房）は、近代史再考の上では有益だが、入門書とはいささか総合性を欠いているだろう。

その点、本書を含めた今回の山川出版社の『世界歴史大

史苑（第五一卷第二号）

系』は、三冊でイギリス史全体を概観する試みがなされており、日本のイギリス史研究者の手による概説書としては、最も量的に拡大したものとして企画されている。本書は、そのうちの十五世紀末のテューダー朝の成立から、十八世紀後半のアメリカ合衆国の独立の時期までを取り扱ったものである。

この約三世紀の間に、イギリスは、「ユーラシア大陸の西の端の沖合に位置した『二流国』」から「自他ともに認める大国」にまでのしあがり、国内では、宗教改革によって「ローマ教皇の普遍的な支配」から主権国家として独立し、さらに十七世紀の二つの革命によって、他国に先駆けて「国王大権の恣意的な行使に歯止めをかける体制」を樹立した。多くの人が思い浮かべる近代イギリス——大英帝国は、まさしくこの時期にその基礎が打ち据えられたといえるのである。本書では、この時代を政治史を中心に概観していく。その視角は、本書の編者今井宏氏も加わった有斐閣の『概説イギリス史』の発展線上にあると言えるが、この概説書よりも量が増えた分、単に叙述が詳細になっているだけでは、決してなく、従来の概説書では記述を簡略に、また別個にせざるを得なかった、宗教と政治の係わり、スコットランド・アイルランドとイングランドとの関係、イギリスに対する国際情勢の影響も併せて記述されており、

今井宏編『世界歴史大系 イギリス史2 近世』(西川)

より広い視点に立ってイギリスを捉え直そうとしている。そこには、確実に、新しいイギリス史の研究動向が窺える。加えて、イギリス史特有の用語や史学史上の学説の変遷についても、補説や章末に付けられた註で丁寧な説明が添えられており、さらにイギリス史の基礎知識についても、きめ細やかな配慮が払われている。イギリス史にこれから踏み込んでいこうとする読者にとっても、高度の理論を噛み砕いた格好の入門書ということができよう。

本書は、今井氏の他、清水祐司、小泉徹、大久保桂子、青木康の諸氏(執筆順)が、それぞれ各氏の得意とする時代を担当するかたちで執筆されている。いずれの叙述も平明で読みやすい。通史を時代ごとに分担することに伴って避けることが困難と思われる不統一も、通読したかぎり、それほどには印象に残らなかった。もっともその反面、三世紀の間の歴史的变化をそれぞれずっと読めってしまうところに、多少の戸惑いも感じるが、歴史への取り組みの姿勢、各時代の把握の仕方の違い、といったものを極力控え、いささか控え過ぎたところもあるのではないだろうか。

また、「はじめに」で、簡潔にこの三世紀の概略が書かれているが、それ以外では、長期的な変化については断片的にしか語られていないように思う。例えば、社会全般の変化は、第四章と第十章でそれぞれ「ピューリタン革命前

の文化と社会」「十八世紀の社会」としてまとめられているが、政治史を中心とした他の叙述部分の補足的意味合いが強いので、その点は物足りない。

最後に本シリーズのイギリス史の時代区分について。アメリカの独立という海外の事件で本書の時代を切ったのは、三巻本の概説書としての配分上の考慮があるのではあろうが、いささか尻切れとんぼの感を免れない。この時期のイギリスは、工業化社会がまさに始まろうとした時代であり、社会史上はここで区切るのが一つの方法なのかもしれないが。しかし、「新しい時代の陣痛」が始まったばかりのところを、議会内の叙述だけで締めくくっているのはどうであろうか。

(A5版、本文四〇〇頁、付録五八頁、定価五、〇〇〇円、山川出版社、一九九〇年)

(立教大学史学専攻博士課程後期課程在学)